つづら折林道に
遺った石工の技

用郷林道七曲がり

岡山三大河川の一つ高梁川本川には見当たりませんが、中流部を流れる支川には見事な滝があり、その一つ別所川の鳴滝は大木に覆われて見事な景観をみせています。この鳴滝のそばにつづら折の林道「七曲がり」があります。

たたら製鉄で有名な新見では、木材の伐採や木炭の生産が盛んで、その搬出のために林道建設が計画されました。この工事監督として派遣されたのが、第五高等学校（現・熊本大学）を卒業したばかりの林務技手・佐賀政光でした。彼は自動車の時代が来ることを念頭において設計しましたが、請け負った地元の石工・池田金作は石積み林道を主張し、設計変更を求めました。

こうして明治 45（1912）年、鳴滝橋の袂を始点に雄滝の上部を終点とした全長 6㎞の用郷林道が完成しました。高低差 33.4m の難所を越えるため、石積みの擁壁が築かれたつづら折り道「七曲がり」は、屈曲部は 6 か所で延長 330m、勾配は 8.7 ～ 11.6％の石積みとなっています。この勾配は牛馬車を想定した当時の林道の基準は満たされていますが、幅は最も狭い箇所で 2.0 m、カーブでは 2.5 mしかない箇所もあり、当時の馬曳きにとって命がけの道であったと思われます。なお、現地で石材を調達したらしく、石積みは乱積みです。菅生には池田金作をはじめ佐賀将光の碑を請け負った中島久松をはじめ石工がいたようで、屋敷周りの石垣や城郭石垣を思わせるような石垣がみられます。

かつて佐賀が設計したように、戦後に自動車が普及すると、林道の付け替え計画が浮上しました。用郷林道の改修が安価でしたが、住民が要望した村役場に通じる別ルートで建設されました。それ以降、自動車が通れない「七曲がり」は使われることなく、現在も建設当時の姿のままで残っています。

「七曲がり」の傍らには、工事の途中で病に倒れ、ついにその完成を見ることができなかった佐賀の功績を讃える記念碑が立てられています。

■位置図

木炭の搬出に利用されたつづら折の七曲がり
屈曲部の石積みは、路盤の線形にあわせて局面となっている

石積み用の石材を切り出した痕跡

鳴滝（雄滝）を背に立つ石碑
「故林務技手佐賀政光君之碑」

2 km 離れた麓の集落まで滝の音が聞こえると言われたことから「鳴滝」とついた

市道別所用郷線「用郷林道　七曲がり」（延長 300 m、高低差約 33 m、幅 2.0 ～ 4.6 m）
屈曲部の石積みは路盤の線形にあわせて局面となっている。多くが 50 ～ 70㎝前後の石材だが、最大のものは 170 × 70cm の石材も見られる。